
テスト

伊田 二郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テスト

【Nコード】

N9033F

【作者名】

伊田 二郎

【あらすじ】

全国から選ばれた100人近い中学三年生がいつせいにテストを受ける。一番成績が良かった人が1000万円を手に入れる。しかしそれはテストという名の死のゲームだった。

テスト1 始まり

8月11日

午前九時を過ぎたところだというのに気温はすでに30 を超えていた。幸い湿度が低いため日陰に入ると涼しいが、日なたにいるとすぐに倒れそうな暑さである。

こんな日のこの時間に外にいるのは元気な子供や運動部の学生だけだろう。しかし、今日日本全国から選ばれた100人近い中学3年生がある場所に向かっていた。

彼らの目的はテスト。テストを受け一番成績が良かった人が優勝賞金1000万円を手に入れる。誰が何のためにそんなことをするのか。彼らはそんなことを考えない。1000万という数字に魅了されテストを受けに行くのだった。

森宮愁斗《もりみやしゅうと》もその一人だ。いわゆる天才で運動神経も抜群、おまけに美少年と何もかも完璧のように見える愁斗だがたった一つ欠点があった。それは根性がないこと。今までに7個の部を行き渡り最終的には自由部というのを自分で設立。自由部とは行きたいときに行き、寝たければ寝る、遊びたければ遊ぶ、勉強したければ勉強をするという本当にやる気がないものだった。

「あゝ暑い」愁斗がそう言うのも無理はない。

「駅から十分なんて嘘じゃないか」もう三十分以上歩いてるぞ「愁斗の歩くスピードが普通の人の五分の一くらいなので仕方がない。それから愚痴をこぼしながら歩いているとようやく目的地の建物が見えてきた。レンガ造りの建物で三年ほど前までは大学だった。

ここでテストという名の死のゲームは行われるのだった。

テスト2 再会

会場の建物内は冷房で涼しいだろうという愁斗の予想は見事にはずれ、建物内は外と同じような暑さだった。おまけに人がたくさんいるため湿度が高く、ムツとするような暑さで非常に居心地が悪かった。

あっちこっちからこのものかわからないような方言が聞こえるなか、愁斗はふと自分が呼ばれたような気がして振り返った。しかしそこに見覚えのある顔はない。愁斗は首をかしげなるとそのまま壁にもたれかかり、自分の鞆からスポーツ飲料を取り出し豪快にラッパ飲みし始めた。一时间ほど前、駅前のコンビニで買ったものだがもうすでにぬるくなっていた。

「愁斗」

もう一度声がした。辺りを見渡すがやはり見覚えのある顔はない。しかし前方から一人少女が愁斗に向かってきている。背は低いが長い髪でキレイな顔をしている。

「愁斗！」

「は、はい！」

少女のとてつもなく大きい声に会場内は一瞬シンとなった。咄嗟に答えた愁斗だったが、いまだにこの少女が誰かは分らない。

「え」と、どなた？」

「あんた私を忘れるとはいいい度胸ね」

次の瞬間、少女の脚が愁斗の脇腹を捕らえた。愁斗は2メートルほぶっ飛んだ。

「あ、茜？」

野崎茜《のざきあかね》、それが彼女の名前だ。愁斗とはいわゆる幼馴染だったが、小学3年生のとき、父を交通事故で亡くし、母の実家である関西に引っ越したのであった。それ以来愁斗とは会っていないので、じつに6年ぶりの再会である。6年前は背が低いこ

とは同じだったが、今とは違いショートヘアで、体中絆創膏だらけだった。茜の蹴りはそのころから強烈で愁斗を泣かせるほどだった。茜はふんと鼻をならすと「やっと思い出したか」とえらそうな口調で言った。

そのころには会場内も先ほどと同じようなざわめきを取り戻していた。

愁斗と茜はしばらく思い出話や茜が引っ越してからのお互いのことなどを話していた。

しばらくたつたあと放送が流れた。

「受験者の皆さんは奥の部屋へお進みください」

それと同時に、それまで閉まっていた奥の扉が開いた。そろそろとみんなが進んでいく。

「行こ」と茜に言われ愁斗も奥へと進んだ。

いよいよテストが始まるのだ。

テスト3 ルール

奥の部屋は講義を受けるための部屋らしかった。中央のホワイトボードを中心に扇状に椅子と長い机が並んでいる。テレビなのでもよく見る光景だ。中学生にはなかなかお目にかかれる光景ではないのであちこちから感嘆の声が聞こえる。しかしそんなことは愁斗には関係なかった。愁斗は冷房が効いていることにただひたすら感動していた。

特に席指定は無さそうなので愁斗は真っ先に一番後ろの席に座った。そこが一番冷風が当たるからだ。茜は愁斗の斜め前に座った。机の上には既に問題用紙と解答用紙があった。

全員が席に着いたのと同時に「それでは始めてください」と放送が流れた。皆が一斉に問題用紙をめくる。

愁斗は問題を見て唖然とした。難しいと思っていたのに問題はどれも小学生レベルだ。こんなものでは満点が続くだろう。ほとんどの人が鉛筆をすらすらと動かす。それでもなかにはうーんとうなっている人もいた。

1時間半ほどで愁斗は5教科全てを終えてしまった。ふと茜を見ると、茜もすでに鉛筆を動かすのをやめていた。先ほどの話では勉強のことは出てこなかったが、おそらく茜も勉強が出来るのである。うと愁斗は思った。

それから一時間ほどしたとき放送が流れた。「試験終了です。受験者の皆さんは解答用紙を机の上において、すみやかに退室してください。その後採点を行うのでしばらくお待ち下さい」

愁斗は立ち上がりひとつあくびをすると元の部屋へ戻った。湿っていて心地の悪い熱風が愁斗を襲う。その直後に茜に話しかけられた。

「どうだった？」

「満点だな」

自信に満ち溢れたような声で愁斗はそう答えた。

「またまた」

茜がいかにも信じてなさそうな目で愁斗を見ている。

「それよりお前はとうんなんだよ」

それ以上言うのが面相くさくなった愁斗は茜のことを聞いた。

「私も満点だよ」

本当はやっぱりと思ったが、わざとらしく「うそつけ」と愁斗は言った。

一時間ほどで採点は終わった。もう一度奥の部屋に入れと放送が入ったのだ。

愁斗は先程と同じ席に着いた。茜もそうだ。そして全員が席に着くと同時に再び放送が流れた。

「結果発表の前に改めましてこのテストのルール説明を行います。テストは全部で七回行います。最初のテスト、つまり今回のテストでは上位64人を合格とします。それから半分にしていきます。最後に残った人が1000万円を手に入れます。テストはどんどん難しくなっていくます」

愁斗は何故テストがあんなに簡単だったのか納得した。放送はまだ続いた。

「そして合格できなかった人、つまり不合格者には…死んでもらいます」

会場内が一気にシンとなった。それから泣き声や怒り狂う声が響き渡った。

「ふ、ふざけんじゃねー！」

前のほうに座っていた一人の男がいきなり立ち上がって怒鳴った。

「こんなの聞いてねーぞ！」

「ええ、ですからここからの参加は自由です」

「え…」

男が言葉に詰まる。

「もう一度言います。ここからの参加は自由です。帰りたい人は帰ってください」

「じ、じゃあ俺は帰るぞ」

男が必死に動揺を抑えて言った。

「どうぞ」

男は立ち上がり出口へと向かっていった。

「いいんですか？ 五十嵐君。あなたは親が残した借金を返さなくはいけないのでは？」

五十嵐と呼ばれた男が立ち止まった。

「五十嵐君だけではないはずです。ここにいる皆さんがなにかの目的がある。違いますか？」

愁斗は自分のことを考えた。自分には特にお金が必要なことがない。お金持ちではないが、お金に困るほどでもない。茜はどうなのだろう。後で聞いてみよう。愁斗はそう思った。

「う、うるせえ！」

そう言つと五十嵐は部屋から出て行つた。部屋には異様な空気が流れている。そんな中放送は続いた。

「もう帰る人はいませんか？」

はじめはなんとも思わなかった声が今では悪魔の声にしか聞こえなかった。

「では結果を発表します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9033f/>

テスト

2010年10月11日01時42分発行